# 児童養護施設の可能性

荒　屋　昌　弘

## 1. はじめに

2016年、児童福祉法が改正された。子どもは権利の主体者であると明記され、健全な成長発達を保障し、当たり前の生活を約束する内容となった。この法改正を受け、厚生労働省より「新しい社会的養育ビジョン」が提示された。その中身は、里親委託や養子縁組といった家庭養育の促進や施設における個別ケアを柱とした家庭的養育の展開といった支援形態の変革、また、自立支援の一環としたアフターケアの推進といった支援の拡大、さらには、児童相談所や市町村の児童福祉が整備するべき支援体制に関するものである。

2011年に提示された「社会的養護の課題と将来像」に取り組む最中での方針転換であったこと、期限付きの大幅な里親委託や養子縁組への転向、3歳未満は原則施設への措置を行わない等、施設関係者においては自らの存在意義を剥奪されたような衝撃であった。しかし、「子どもの権利条約」を日本が批准した1994年から20年以上経た後のようやくの法改正であり、「新しい社会的養育ビジョン」に示された内容を概観して分かるのは、Bowlbyが著した「乳幼児の精神衛生」(1951)に示された国際的な公衆衛生の考えや実践に基づいており、認知、知的、情緒発達に関する調査研究を根拠にした政策である。また、何より「子どもの最善の利益」の実現という理念に支えられたものであることは間違いないことを考えると、考える価値はある。

国が打ち出した政策、また、それに対する施設関係者の反応や漸次展開する取り組みなど、現在、児童養護施設は岐路に立っていると捉えることができ、新たな方向へと進む機会であるといえる。岐路に立つ児童養護施設の今後のあり方やその可能性を検討（もっとほかに良い言葉があるか）するためには、トラウマを抱えた子どもたちへのケアにおける困難性を取り上げ、彼らへのケアの方法論について改めて考える必要があると思われ、また、そのためには足元を見つめる作業が不可欠だと考えている。ケア実践における困難性は虐待や剥奪等が子どもたちに与えたトラウマや心の痛みに起因するものであり、それらは破壊的な言動、ケアワーカーの心身の疲労としてあらわれ、心の次元で取り組むことは難しいのであるが、児童養護施設が有する特有の困難さについて考えることにより、困難を背負わされた子どもたち、ケアワーカーやスタッフチーム、さらには施設組織が陥る苦境について光を当て、ケアワーカーや施設組織が機能不全にならず、生き残るための手掛かりを見出すことができると考えている。

ケアの実践が展開するのは、時間という歴史性と空間という風土性とを有する場においてである。そこに参加する私たちにより場は作られもするが、また、場より影響を受けながら私たちの体験は生み出される。つまり、自と他と場との相互作用により体験世界は生成されるのであり、このような場について山本（2015）は「臨床的土壌」と概念化し、「我」と「我々」との区別があいまいな日本文化において、自他融合的な母胎としての臨床的土壌という概念は有用であると述べる。児童養

護施設でのケアは生活を基盤としており、家庭を省みれば想像できると思うがそこでは自他融合的な状況が生まれやすく、むしろ避けられないという特徴を持つ。「臨床的土壌」という概念は児童養護施設でのケアを考えるときにメタファーとして様々なアイデアをもたらすように思う。たとえば、子どもたちの言動として形をもってあらわれた現象に対し、それらを生成する種、それらを芽吹かせる土壌を想定することができる。

ケアが展開する場をいかに「臨床的土壌」に成し得るかが問われるわけであるが、まずは自らが働く土壌の性質を知ることが重要となる。つまり、この自他融合的な状況においては子どもたちが抱える心の痛みは個を超えて、ケアワーカーや施設組織にも影響を及ぼし、また、ケアワーカーや施設組織の健全な機能は子どもたちの発達や成長に影響を与えるという性質を認識することが必要である。子どもから発せられたとき、必ずしも明確な対象を持たない言葉や行為も、自他融合的な状況においては、ケアワーカーの心身的反応や施設という場の中に意味あるものとして形をあらわすことがある。子どもたちの心がプロセスする「臨床的土壌」であるためには、ケアワーカー自身、また、施設組織自体に関心を向け、あらわれてくる形をそれと見出す目を必要とする。

児童養護施設での支援において、子どもたちが抱えるトラウマや心の痛みを受け止め、理解し、彼らの健全な発達や成長を保障することが重要であるが、様々な困難に直面する。心の痛みに対しケアワーカーや施設組織は防衛的になり、耐えられずに目をつぶり、そのために行き詰った状態に陥る。本論では、この行き詰まりを打開するための方法論を検討するために、まずは児童養護施設が持つ特殊性について論じる。また、物語という視点を導入する有効性、さらに、児童養護施設でのケアに底流するテーマをあらわす物語として「オイディプス王」を取り上げ、それを参照することにより、子どもたちの健全な成長発達を促進するためにケアワーカーや施設組織が果たす役割や専門性について論じたいと考えている。

## 2. 児童養護施設という文脈

児童養護施設には、子どもたちや家族が持ち込む文脈、施設が持つ文脈、社会がもたらす文脈、ケアワーカーが持ち込む文脈などが錯綜しており、そのときに立ち上がる現象を理解するには、その背景にある文脈をふまえておく必要がある。ちょうど、文章と文脈の関係のようなものである。

施設での生活支援は密接な関係性が支援の基盤となるため、自他の境界が保ちにくいという特性がある。入所している子どもたちは、剥奪、喪失、暴力、ネグレクト、性被害、侮辱等を体験し、恥、不信、疑い、恐怖、絶望、無力感等が心の中に詰め込まれており、慢性的な虐待により、侵入、麻痺、回避症状などトラウマ症状を呈する子どもが少なくない。これらの子どもたちの心に詰め込まれたネガティブな感情体験やトラウマ症状は、子どもたちの中で収まっているだけではなく、それらの症状の特徴は支援するスタッフにも伝播し、さらには職員集団、施設組織にも影響を与えることになる（鈴木 , 2015）。

たとえば、日常的な宿題場面を取り上げてみる。宿題が分からないことで子どもは不安と恐怖を喚起され、教えようとするケアワーカーに対して辱め、攻撃してくる対象を見ているかのように敵意を向け、プリントをビリビリに破いてしまうなどの場面に遭遇することは少ないだろう。このとき、ケアワーカーは侮辱されたと感じるであろうし、また、支援者としての自らの能力に疑いを持

つかもしれない。倒錯した養育環境で育ってきた子どもたちにとって、「宿題を教える」というこちらが良いものだと信じる支援であっても、それは決して栄養のある良いものとは思えず、むしろ、分からないという恐怖、馬鹿にされたという恥ずかしさや苛立ちをおぼえるものにしか見えないのであろう。子どもたちがこれまで曝されてきた痛みに満ちた情緒体験は決して抱えきれるものでも言葉に表現できるものではなく、関わるケアワーカーへと投影される。このように児童養護施設においてケアワーカーが体験する感情は、恥辱や無力感、怒りといった性質を帯びやすく、それは手当されてこなかった子どもたちの心の痛みやトラウマは投影され、スタッフの情緒体験として姿を見せるからなのである。

次は、朝のミーティングの一コマを描写したものである。

あるスタッフは、「昨晩も2時頃に寝られないとA君が起きてきました。部屋に戻るように言いましたが、なかなか言うことを聞いてくれず、結局寝たのは4時でした。」と茶飯事として淡々と報告する。次のスタッフは、「Bさんがまた Cさんを挑発し、喧嘩になり、2人を制止するとCさんは怒り出し、「いつもわたしばっかり！」と叫び、施設を飛び出しました。最近、続いています。」とうんざりした様子で話す。また、あるスタッフは、「D君の部屋に物がまた増えており、理由を聞くと「お前に関係ないやろ！」と部屋に閉じこもり、話をしてくれませんでした。」と戸惑った様子である。

日常的な朝のミーティングの様子である。具体的な行動のみの記述であり、観察された断片的な内容はバラバラなままに雲散し、行動として表面化した子どもたちの心もバラバラなままでまとまらず、理解に欠けた報告のみに陥ってしまっている。様々な刺激により子どもたちは虐待状況や剥奪、喪失、またそれらによる未消化な情緒が喚起され、行動化してしまう。家族との交流があったのか、学校生活に不安を抱えているのか、スタッフとの関係不全があったのかなど、「何があったのだろうか？」と想像してもよいのだろうが、実際には思考が断片化し、ケアワーカーにおいても未消化なまま過ぎてしまうことが少なくない。報告しているスタッフの「淡々」「うんざり」「戸惑い」といった情緒的な反応は重要であるが、誰かに取り上げられることは稀であり、自らの反応に無自覚であれば、むしろ、指摘されても抵抗感を刺激することにしかならないだろう。

子どもの様子やスタッフに喚起される情緒的反応を観察することにより、断片的にならず見通しをもった理解を得ることができればよいのだが、それは困難であることが多い。それは何故なのだろうか。

平井（2011）は、思考することが阻害される要因は、子どもたちが抱える心の痛みのインパクトであると述べ、そのインパクトにより思考は断片的、部分的になると指摘する。剥奪や虐待を受けてきた子どもたちとの関りにおいて彼らの心を受容し、理解し、支援していくにはその痛みに耐えながらも、過去 - 現在 - 未来と展望をもって考えられる専門性が児童養護施設には必要とされる。しかし、彼らが抱えているもの、背負わされたものは、私たちにとっても目を閉じたくなるような心の痛みである。

以上、児童養護施設が内包する性質を見てきた。生活支援という関係性を基盤とした、自他の境界はあいまいになりやすい状況において、子どもたちのトラウマや心の痛みはスタッフの情緒体験として顕在化する。ケアワーカーの疲弊、心身の不調、離職率が高さ、また、スタッフ間のコミュニケーション不全など施設が抱える課題を解決する糸口を見つけるためには、このトラウマや心の痛みに焦点を当てる必要がある。なぜなら、それが種となり様々なドラマを展開するからである。次

は、物語という視点を導入することにより、子どもたちへの理解に新たな光を当ててみたい。

## 3. 物語を生成する存在

藤井（2011）は、意志決定に物語が影響を与えると論じる。物語が人々の行動や記憶、認知に影響を与えることが明らかになってきており、「人間の根底に物語が存在している」と述べる。以下は、藤井らによる論文（2011）を参考に人と物語の関係についてまとめたい。

Bruner（1990）は、物語は人間が物事を理解し思考する際の重要な方式となっていると指摘する。科学的な理解をもたらす「論理実証モード」に対し、「物語モード」における理解や認識は、実体験に関連付けられ、より直接的に人間の意図や行為に影響を及ぼし、行為や実践において重要な役割を演ずるという。Gerge らは、自己認識は物語的に構成されると指摘し、その人の人生に一貫性をもたらすのみならず、現在の生の意味や方向性の感覚をもたらすと述べる。Schank & Abelson は、認知活動の中でも特に記憶において物語が果たす役割について論じ、ものごとは物語としてしか記憶されないと主張し、また、Miller は、社会や集団は物語を共有することで共有認識を生み出し、社会や集団に共有された物語が意思決定や判断の基盤にあると論じる。

これらの論考から、人は物語を通して状況を認知、物語を生成する存在であり、さらに、それは関係や集団において共有されることにより、人の活動においても影響を与えるといえる。以下において、物語的存在という視点から社会的養護下にある子どもたちの心を理解する可能性について論じたい。

虐待やネグレクトが疑われる子どもたちの長期的な支援計画を作成するときのアセスメントのために開発されたツールとして、ストーリー・ステム・アセスメント・プロファイル（Story Stem Assessment Profile、以下 SSAP）がある。SSAP は子どもたちが作り出す物語よりアタッチメントタイプをアセスメントする心理検査であり、人形や動物のフィギアを使い、物語の初めの一部を子どもに提示した後、「次に何が起こるのか話してちょうだい」とその後の物語を展開することを促し、子どもが作る物語より彼らの家族関係についての期待や認識について体系化された情報を得ることができる（Hodges et al. 2009）。同じ刺激であっても子どもごとに異なる物語を作るわけであるが、その物語より自己や他者についてどのような関係を持ち、どのように体験しているかについて知ることができる。この SSAP は、Bowlby のアタッチメント理論に基づいて作成されており、子どもたちが作る物語は彼らの内的作業モデルに影響を受けると考えられている。

Hodges ら（2009, pp.226-227）の論文を参照し、アイリーンとスティーブンの事例を比較する。まず、提示される物語のはじめの部分は次のような内容である。

「子どもが 1 人で学校におり、他の家族はみんな家にいる。子どもは学校で、1 枚の絵を描く。その子どもは、「この絵は、僕が描いたんだよ。とっても上手にできた！この絵が好き！家に帰るときに、この絵を持って帰るんだ」という。学校が終わると、家にその絵を持って帰り、ドアをノックする

.....さあ、ここで何が起こるか話してみてね。

アイリーンの物語

女の子は素早く両親の膝の上に乗って、「ママ！パパ！ママとパパのために絵を描いたよ」という。母親は「ワーッ」と賞賛の声を上げた。アイリーンは、その女の子は「パパの膝の上」に座ったと言い、その物語は女の子が両親と一緒にテレビを見るところで終わった。

スティーブンの物語

父親がノックに応え、「何てまぬけな絵なんだ？」とその絵を投げ捨てた。男の子は走り去った。父親は、「その子の絵をビリビリに引き裂いた」。さらに促すと、スティーブンは、その絵については誰も何も言わなかったか、誰も気づかなかったと言った。残りの家族は、その男の子を残してピクニックへ行ってしまった。彼らは、男の子から隠れていたので、男の子が探しても家族を見つけることができなかった。彼は家の最上階にある自分の部屋へ行き、そこから身を投げた―彼は「頭が割れた」。父親は彼に激怒し、「馬鹿」と怒鳴って部屋の中に閉じ込めた。男の子が警察に電話すると、警察も「馬鹿なガキだ」と言った。

アイリーンは二度の養子縁組の失敗の後、里親家庭で１年以上暮らしており、スティーブンはネグレクト、暴力、親の精神疾患など多重の問題を抱えた家庭で養育されてきた。提示された物語の始まりの部分の内容は同じであるが、その後の物語の展開はこれほどまでに異なることに驚く。二人が反応として描写した物語は、子どもの根底にある対人関係についての内的作業モデルにより生成されたものだといえる。これらの事例からわかるように、虐待や剥奪による心へのダメージは物語を生成する源泉の部分に影響を与え、子どもたちはそれが生み出す物語を通じて状況を認知し、人と関わるのである。

施設生活の一場面においても、子どもたちが自らの物語を話してくれることがある。A 子は自分の出生に関する物語を話してくれた。彼女は、母親の内縁男性からの性虐待を理由に短期間ではあったが施設に保護された。A 子は母親の内縁男性について、面倒をよく見てくれる人だったと話す。そして、「私はお母さんのうんことして生まれてきてん。普通ならば流されるところだったけど、お父さんがキャッチしてくれてん。」と自らの誕生について触れ、排泄された大便として流されて当然だったが、父親のおかげで今生きているのだと話してくれた。

両親の間の関係、その関係の中で創造された待ち望まれた命という物語とは対照的な内容である。当時、施設での慣れない生活にもかかわらず明るい態度を見せる A 子は、虐待や剥奪体験により不安や悲しみを感じるよりも、「流れず生きているのが奇跡。だからまだまし」と自分が置かれた現状を深刻なものとして認識していないように思われた。自分の存在を排泄された不要なものと感じている A 子は、Henry（1974）が概念化した「二重剥奪」の状態にあると言え、自分の情緒体験を価値がないものとして切り離し排除していると理解できる。そのため、A 子の心に関心を持ち、受け止めようとする対象に出会ったとしても、彼女はその対象の価値を認めないか、心の痛みを刺激する迫害的な対象として回避することになるだろう。A 子が安全安心の生活を手に入れ、ケアを受けられるようになったとき、彼女は目の前の状況をどのように認知し、仲間やスタッフと一緒にどのような物語を生成するのだろうか。ケアワーカーの手から零れ落ちようとしたり、関心を拒絶するような関係性の物語を A 子は展開するかもしれないが、彼女の物語が生成される源泉に目を向け、物語にあらわれた彼女の心を理解する視点を持てるか否かにより、ケアの質は当然異なる。

虐待やネグレクト、剥奪など逆境状況にあった子どもたちはそれぞれの体験に基づき、今の状況を生きており、同じ児童養護施設で暮らしていても、それぞれが異なる物語を紡ぎながら生きている。子どもたちの個別性を理解し、ケアを提供するためには、ひとりひとりが生成する物語の性質

について理解することがその手掛かりになることについて確認できたと思う。

## 4. 物語から子どもを理解し、支援について考える

子どもたちはそれぞれの背景を持ち、それぞれの物語を生成する源泉を蔵し、それが台本のように働き、人は物語を生成する存在として捉えることで、個別性に基づき理解する可能性について述べた。このような視点は新しい発見や展望のある理解とケアを生み出すと考えている。ここでは、神話や昔話、芸術作品など既存の物語には心の普遍性が表現されているという視点に立ち、物語を通して子どもやケアワーカーの心について理解を得る可能性について考えたい。

神話や昔話、その他の物語は私たちの深層心理の世界を描き出したものであり、それらをテキストとして、心の深層の理解へと迫ることが可能となる（河合 , 2002）。ある人が生成する物語は個別のものであるが、神話、昔話、その他小説や映画など作品となった物語と共通するテーマを持つことがある。Bruner らの論考より、人は物語を通して状況を認知し、物語を生成する存在であるといえるが、メタレベルで認知されることにより、それは物語として形を見せる。行き詰った状況を物語の一部として把握し、アナロジーとなる作品を参照することにより、その状況を打開する手掛かりが得られる可能性について 2 つの事例を通して検討する。物語には始まりと終わりがある。そのため、行き詰った状況に至った要因を物語から見つけ、物語の結末からはそのあとどのように展開するか見通す手掛かりを得ることができる。物語を手掛かりに行き詰った状況を俯瞰的に観察し、見通しを持つことにより、現在において何を選択するべきか知り、これまでの支援を見直していくプロセスを見ていただきたいと思う。

1 つ目は、「千と千尋の神隠し」を手掛かりに支援に行き詰った状態を抜け出した事例である。当時、高校 2 年生の B 君は施設の退所を 1 年後に控えていた。B 君は高校 1 年のときから不登校となり、みんなが活動する朝や昼の時間帯は、布団から出てくることも難しい状態に陥っていた。厳しい現実や将来について考えなくてもよいように、布団は彼を守る皮膚であり、「このままではいけない。これからどうしていこうと思っているのか」という問いかけに対しては、寝たまま（mindless）か布団（second skin）にしっかり包まることでバリアを張り、はね返すばかりであった。学校、就労、自立、退所に関する問いかけは、現実について考えることを促す言葉としては働かなかった。私たちスタッフは将来の見通しもアプローチの方法も見失い B 君と同様、何も考えられない状態（mindless）に陥った。その時期に福本（2006）による「福祉と心理の間」に関する論考を目にする機会に恵まれた。

福本（2006）は、「千と千尋の神隠し」に登場する「カオナシ」に対しては、心理療法よりも福祉的な支援が適当であると考察する。「顔がない」ということは履歴とアイデンティティを持たず、そのようなカオナシには何者かを問う心理療法は向いておらず、まず必要とされる支援は作業と居場所を確保することが適当だと論じている。B 君は 2 歳のときに乳児院から児童養護施設へ移動してきたが、彼自身はなぜ家から離れ、親と一緒に暮らせないのか知らず、知りたいという意思も見せなかった。「カオナシ」についての福本の考察を参照し、B 君の支援について再度検討を行い、得られた理解は、「あなたは、何を考えているのか？」と問うようなそれまでのアプローチは B 君には痛みでしかなく、思考を促進する性質ではなく、居場所と社会参加できる環境を確保することが先決

であるということだった。どこからきて、どこへ行くのかわからない彼が将来に何かを期待し、現実の不安に耐えることは困難である。物語の中で「どこから来たのか？おうちにかえりなさい」と千尋に言われたカオナシは、「さびしい」と体を歪め、また、薬のはずの苦団子を与えられてもカオナシは吸収できず、吐き出すしかなかった。この理解は行き詰った支援に光を投げかけ、これまでの支援を見直し、「施設を退所した後も、作業所とグループホームは必ずあるからまずは安心してよい」とB君に伝えることができた。スタッフと一緒に見学したうえで、自分で選択するよう促すと、ようやくB君は布団から出てくることができた。

2つ目は、ケアワーカーへのコンサルテーションの事例である。この事例では、アナロジーとなる昔話を通して、自らが陥っている状況をメタレベルで認知でき、物語の展開をヒントに実践方法を検討した。子どもたちへのケアに自信が持てず、出勤することを考えると憂鬱になると話すC氏は心身共に疲弊している様子であった。その一方で、子どもたちの前では気丈にふるまい、疲れている様子を見せて子どもたちに心配をかけてはいけないと思うと緊張して話す様子からは、要求がましい子どもたちへの対応に疲れだけではなく、怖れを感じているような印象を受けた。コンサルテーションでは、C氏の働き方や状況から「鶴女房」が連想され、そのことを共有した。C氏は、子どもたちの前では常に明るく、元気な姿を見せており、自分の心身の疲労はあまり自覚せず、周りには見せないように、また、自分でも見ないようにしていた。ちょうどそれは、襖の向こう側で身を削り機織りする鶴女房と類似していた。疲弊している状況に自分自身では目を向けることはできなかったものの、「鶴女房」と比較することにより振り返りやすくなり、C氏が本当の姿を見せなければ、子どもたちの貪欲な要求はエスカレートするであろうし、「鶴女房」の結末を見る限り、このままでは不幸な結末しか待っていないと、自分が置かれている状況や展望について俯瞰的な理解を得たようであった。「見るなの禁」は理想的な養育者として子どもたちの要求に応えようとしたC氏により生み出されたとも言えるが、同時に母性を剥奪された子どもたちは貪欲にC氏からのケアを求めるが、それによりC氏が傷ついている事実に目を向けることを回避する心性も関わっていたのであろう。C氏は理想的な養育者を目指し、疲弊し、リタイヤする結末ではなく、対象を傷つけない関係の持ち方を子どもたちが学ぶためにも襖を開けた支援を目指す方を選んだ。

既存の物語とのアナロジーから考察することにより、行き詰った状態を俯瞰的、全体的な視点から観察することが可能になる。始まりと終わりを見通す中で現在が持つ意味を把握し、主体的な選択を可能にする利点を有するなど、ケア実践において物語の視点を導入する有効性について検討してきた。

## 5. オイディプス王の物語

ある物語をアナロジーとして参照し、理解の手掛かりにする可能性について検討した。次は、より普遍的な物語として「オイディプス王」を取り上げたい。精神分析の誕生と発展において決定的な物語であるが、それは私たちの心を理解するときの普遍的なテーマが存在するからであると言える。さらに、親から離れて暮らす児童養護施設の子どもたちを理解するとき、また、彼らへのケアを考えるとき、「オイディプス王」の物語より得られるアイデアは豊富であり、児童養護施設という文脈に底流するテーマに合致した物語である。この物語を手掛かりに子ども、ケアワーカー、組織

を理解するための視野を広げたいと考えている。

Klein（1928）は、現実世界に関心を持つようになるかどうかは乳幼児期において両親の間の関係を発見し、それに関心を持つことができるかどうかに影響を受け、その能力は情緒的、また、知的な発達と密接な関係にあると論じた。エディプス・コンプレックスと心の発達、成長との深い関連について指摘する研究者は少ないが、社会的養育下の子どもたちにとって、これはとても困難な課題である。実親とは一緒に生活できず、親の存在や名前も知らない子どもたちも少なくなく、また、どちらか一方の親から生まれきたと信じ込んでいる子どもなど、カップルとしての両親があり、両親の関係により創造され生まれてきたという大前提が崩れている子どもたちが存在する。彼らが両親の関係について知るのは、自分たちを養育できなかった、自分を捨てた、虐待したという事実であり、考えるに耐えられる内容ではない（Canham 2003, Moylan 2012）。社会的養育下にある子どもたちにとって、エディパルな状況に耐え、それについて考えることは大きな痛みと混乱を伴い、目を閉じてしまいたくなることは容易に想像できる。しかし、先述したKleinの論考からは健全な知的、情緒的発達においてそれは避けて通れないことであり、彼らが大人になり、パートナーを見つけ、子育てを行い、家庭を維持するためにも避けられない発達課題である。つまり、エディプス状況は児童養護施設で働くスタッフにとって支援の要であり、一方で見たくない考えたくないぐらいの痛みや困難を孕んでいる。

ここでは、社会的養育となった子どもたちを理解する手掛かりをソポクレスによる戯曲「オイディプス」物語より得ることを主眼とする。Canham（2003）、Moylan（2012）らを参考に、「オイディプス王」物語をまとめてみる。

「オイディプス王」

子どもに恵まれなかったテーバイ王ライオスは、だれにも相談せずに神託を受けに行く。そこで、「子どもがいないのは幸い。生まれてくる前の子どもは王である父を殺し、母と結婚する」と神託を受ける。狼狽したライオスは、その晩より妻と性交することをやめてしまう。何も説明されないまま遠ざけられたイオカステはライオスの態度に不安になり、ある晩、夫に酒を飲ませ、酔ったライオスと性交する。イオカステは妊娠し、男の子を出産することになる。

ライオスは神託を恐れ、その子を奪い、踝に釘を刺すことで動けないようにし、山で殺してくるよう家来に命じるが、不憫の思ったその家来は他の国の友人にその赤ちゃんを預け、その男から子どもに恵まれなかったコリントスの王、ポリュボスとメロペーのもとにその赤ちゃんは渡り、2人は自らの子どもとして大切に育てる。踝の傷より“オイディプス”と名付けられ、育てられるが、青年になった頃、友人から「お前は王に似ていない。王の本当の子どもではないのだろう」と言われ、混乱したオイディプスは生みの親であるライオスと同様に神託を受けに行き、同じ内容の神託を聞くことになる。ポリュボスとメロペーとは事実をオイディプスに告白しておらず、2人を実親と疑わないオイディプスは愛する両親を守るため、生まれ育ったコリントスを旅立つ。放浪するオイディプスは三叉路で王を乗せた馬車と出会い、道を譲るよう命じられるがそれに腹を立て従わず、王は御者に馬車を走らせるよう命じ、轢かれそうになったオイディプスは御者と王を殺してしまう。殺された王が実父のライオスであり、テーバイを混乱に陥れているスフィンクスを退治するために神託を受けに行く途中だったのである。スフィンクスは謎をかけ、答えられなければ食い殺すのである。「1つの声を持ち、あるときは4本足、あるときは2本足、あるときは3本足。足が多いときほど力

が弱い生き物とは？」、その謎にオイディプスは「人間だ」と答え正解し、スフィンクスは谷へと落ち、死ぬ。テーバイの救世主となったオイディプスは国王となり、実母であることを知らず、イオカステとの間に4人の子どもを授かる。

それから17年後、疫病が蔓延。「疫病を止めるためには、先王ライオスを殺した者を追放せよ」という神託を受け、これまで隠されていた事実が明るみへと引っ張り出される。コリントスの使者がポリュボスの死を伝え、ポリュボスとメロペーは実親ではなかったことをその場でオイディプスは知ることになり、事実が明らかになると、イオカステは首を吊り、それを知ったオイディプスはイオカステが身に付けていたブローチで自らの目を突き刺す。

Hamilton（1982）、Canham（2003）、Moylan（2012）、Sprince（2012）らの解釈を参考にすると、「オイディプス王」の物語を以下のように読むことができる。

生まれてきたオイディプスを二人の関係から排除するライオスとイオカステは、これまでの自由を喪失することに耐えられない未成熟な夫婦として理解できる。喪失の痛みを伴う新しい可能性は脅威として認識する者にとって、神託は字義通りに受け止めてしまう。親は老い、子どもは親を超えて成長するのが現実であり、母親が子どもに没頭し、それまでの夫婦の関係性が変化することも現実である。しかし、彼らには喪失を伴う子どもの誕生は脅威でしかなかった。なぜなら、生まれたばかりの動けないオイディプスの足を傷つけるライオスは、赤ちゃんを迫害者として捉えているからである。

山に遺棄されたオイディプスはポリュボスとメロペーに引き取られ、わが子として育てられる。里親や養親としての存在といえる2人は、実親ではないという真実を隠してしまう。実親に虐待され捨てられたという事実にオイディプスが耐えられないのではないかという心配だけでなく、自分たちには子どもを産む能力がなかったという事実を認めることができず、真実から目を背けた結果だといえる。イオカステは、素性不明の男性が遺棄した息子と同年代であることやライオスや自分の面影があることに疑いを持たない。

結末でオイディプスが明らかになった現実に耐えられず盲目となるが、それまでにもこの物語には痛みに耐えられず、真実に目を閉じてしまう大人たちの行動が繰り返し現れてくる。山に座る両性具有のスフィンクスは、両親から排除されたオイディプスの心的空想を表しており、食べて殺す行為は口唇期的攻撃である。スフィンクスの謎は、オイディプスが抱える問いであったが、その時点での「人間である」という答えは一般的、抽象的なものでしかなく、オイディプス自身の真実に迫る答えにはならなかった。

私たちの心を表す普遍的な物語である「オイディプス王」は、舞台、キャストに続く台本にあたる。次に、オイディプス王の物語を考察し、児童養護施設において展開される物語への理解の可能性、社会的養育下にある子どもへのケアにおける新しい視点について検討する。そのとき、認識すること、観察すること、考えることが主題となる。関わりながらも、何が起きているかを考え、得られた理解をキャストへ返し、キャストとは異なる立場で物語を展開させる監督という観点から考察する。

## 6. 反復される物語と blind eye

真実を隠され、また、その真実に目を向けなかったことでオイディプスは運命に翻弄され、悲劇の主人公となった。子どもたちへの支援においても真実に目を向ける態度が目指される理想であるが、実際にはそれは痛みを伴い、真実に耐えられず、見えない状態に陥り、無自覚なまま思考すらできないことも多い。Steiner（1985）はこのような状態を「blind eye」と呼ぶ。Diamond（2012）やEmanuel（2012）は、オイディプスを囲む大人たちが真実から目を背けた態度からも明らかなように、虐待や剥奪を受けた子どもたちやその家族へのケアにおいては正視するには耐えられないような事実にふれ、それらがもたらした心の痛みに耐えられないため、支援者個人においても、また、支援者集団や組織においてもこの「blind eye」に陥る可能性があると指摘する。虐待死の事件において情報共有の不備が指摘されることが多いが、それは単にシステムの問題だけでなく、支援者の不安や恐怖に対する防衛よる blind eye に陥ったことが１つの要因であると指摘する研究者もいる（Lees, 2015）。

このように、児童養護施設でのケアにおいて blind eye に陥る危険性は日常的に存在しているのである。虐待や剥奪等によるトラウマや心の痛みは、思考されない未消化なままの情緒体験としてとどまっているわけではなく、それは反復強迫として繰り返されるという。Freud（1914）は「想起、反復、徹底操作」において次のように論じている。「転移はそれ自体が反復の一部に過ぎず、反復は忘れられていた過去を、たんに分析医にたいしてだけにとどまらず、現在の状況における他のすべての領域に対しても転移するのだ、ということに気づく。それでわれわれは、被分析者が記憶を呼び醒まそうという衝動の代理をなしている反復強迫に身を委ねるのは、分析医との人間関係においてだけでなく、彼の生活の、それと同時に行われる他のすべての活動や関係においてもそうなのである。」（訳書 , pp53）。

また、Joseph（1978）は、「患者の不安に対する防衛機制が原始的であればあるほど、分析家は患者に無意識的なレベルで利用され、分析空間は理解よりも行動のための舞台（scene）になってしまう。」と述べている。生活支援という治療構造のような枠組みを持たない児童養護施設のケアにおいて、子どもたちのトラウマや心の痛みは個を越えてケアワーカーとの関係性、生活空間のここあそこにその衝撃を及ぼし、理解の対象となる以前にそれが生成する物語として施設生活の中で繰り返されると考える必要があるのだろう。そして、その物語では無自覚なまま支援者もキャストしての役割を担っているのである。

Britton（1981）は、反復強迫は圧倒的な力により物事を動かす性質を持つ一方、静的な性質も持つという。つまり、根本にあるものは認識されず何も変わらないのであり、キャストが変わり、新しいバージョンが作られているようにみえるが、実は同じ台本を演じているようなものであると例える。さらに、Britton は内的世界で起こるプロセスは外の世界と関連しているという理解は精神分析の発見であると述べ、「不安に対する防衛機制が原始的であればあるほど、専門家がかかわるいかなる状況も行動のための舞台になってしまいがちであり、専門家も反復への力に屈するか、無意識的な状況を無自覚に再演してしまうことになる。

さらに Britton は、無意識的な状況を無自覚に再演していることに気づくことが重要であり、再演すること自体には積極的な価値を見出している。「逆転移は分析家の感情を指す用語であるが、それに分析家が気づけるか、患者と関わる中で感情に影響された期待や懸念を抱くようになるかであ

る。私は補完的行動化という逆転移への対抗を意味する用語を使いたい。つまり、分析家による再演は、患者の行動化と相互的な関係にある対象関係を再演したものである。」（1981, pp.51）と論じる。逆転移より被支援者の心的世界を理解する可能性があるように、子どもたちが生成する物語に関与することにより彼の心的世界、特に虐待や剥奪により傷つけられた心を理解する可能性があると考えることができる。さらにいえば、物語を生成しているのは子どもだけでなく、ケアワーカーや施設組織との相互作用により物語は生み出されているのである。

児童養護施設での生活全般に対するケアは構造が曖昧な自他未分化な状況であるため、Britton が論じる「補完的行動化」は強く喚起される。子どもが生成し、展開する物語の一部にスタッフは組み込まれ、一緒に物語を展開する役割を担うのであり、それに参加しつつ繰り返されるテーマを認識し、思考する視点に立たなければならないのである。繰り返される物語はスタッフ個人、ケア関係、児童養護施設という組織、そのいずれかに焦点化し、結実する。それを認識し、観察し、思考し、理解することにより、無自覚の反復されてきた物語から主体性を取り戻すのである。

ケアワーカーは blind eye に陥らず、補完的行動化に気づく能力が求められていることがわかったが、この能力はいかにして獲得され、養われるのであろうか。このことについて Britton（1989, 1998）は、「三角空間（triangular space）」や「第三者の視点（third position）」の達成について論じている。親に対する万能的な空想を手放し、悲嘆し、自分を排除した両親間の関係を受け入れることがエディパルな課題である。この課題を乗り越え、親に対する自他分離の認識を持てるようになると、創造的なカップルとして両親像を取り入れられるようになる。このような段階を経て、自分の内と外の境界が生まれ、心的空間を獲得するという。そのような両親の関係に関心を持ち、それを考えることができる心的空間を「三角空間」と Britton は名付け、分離に耐えながらも観察し、考えることができるようになったとき、関与している自分を観察する視点が持てるようになるといい、「第三の視点」と Britton は名付ける。エディプス・コンプレックスを乗り越えることで、対象と自分の内的世界を俯瞰的、全体的に観察し、考える能力や情緒が発達するという。この「第三の視点」が再演され、反復される物語のテーマに気づく視点であるといえる。逆境的な幼少期を過ごした社会的養護下の子どもたちとのかかわりにおいて、エディプス葛藤が刺激され、賦活することは稀ではない。そして、エディパルな状況に耐え、置かれている状況を俯瞰的全体的に観察する視点を獲得し、維持する必要性はケアワーカーだけでなく、施設組織にも求められる。二重の意味でエディパル状況の克服が必要だと言える。

Moylan（2012）は、虐待や剥奪を受けた子どもたちのケアを行う児童養護施設の組織もまた、エディプス・コンプレックスを乗り越えられない未成熟な状態に陥る危険性があると指摘する。例えば、自分が関与できず、管理職や一部のスタッフのみで決定されたことには不満を持ち、排除されたことへの反応が優勢となり、決定内容を理解するに至らず、拒絶的な態度をとってしまう事例などをあげている。また、葛藤や欲求不満をもたらす現実を直視できず、万能的衝動的な態度をとり、不安を感じながらも将来に備えるための現実的な取り組みがなされず、行動化が優勢となり考えることも振り返ることもできない場合などもそれにあたる。いずれもが、組織内で喚起される情緒的反応に対して blind eye となり、思考よりも行動化に陥っているといえるだろう。ケアワーカーや組織がエディプス・コンプレックスを乗り越えることで現実に目を向け、痛みに耐え、自らを観察する能力を取り戻し維持しなければならない。

子どもと相互に物語を形作りながらも blind eye に陥らず、反復される物語を認識し、理解するこ

とで主人公である子どもたちの主体性の回復を目指し、子どもたちの健全な発達や成長を支えるためには、ケアワーカーや児童養護施設自体がエディプス・コンプレックスに取り組み、成長することが望まれる。そして、子どもたちは施設生活の中でエディパルな状況に耐えて機能する支援者や施設から、現実や事実について考える力を取り入れていくのである。

## 6. まとめ

「児童養護施設運営指針」（厚生労働省 , 2014）には、“ 自主性 ”、“ 主体性 ”、“ 自己選択する力 ” を育てるなど、自立支援を柱とした内容が示されている。自立の定義は様々あり、経済的、精神的、生活的側面から語られることが多いが、施設退所後のアフターケアを通して見えてくる自立支援の要点は、「自尊心」「自己選択」「失敗から学ぶ力」を育てることに収まっていく。言い換えるならば、自分には価値があり、幸せを追求する主体であり、困難な状況でも不安に耐えて絶望せずに現実について考える力を育てることが自立支援であるといえる。幼少期にはく奪を受けた人が成人した後、手に入れた家族、仕事、住居を繰り返し失う姿に接すると、反復される物語の威力の凄まじさを感じ、彼らの物語から目を背けていた自分自身の支援のあり方を振り返らざるを得ない。

Menzies Lyth（1986）は「社会福祉施設に関する精神分析的見解」の中で、入所施設における組織的防衛という観点から論じている。この論文で Menzies Lyth は、入所施設では強力で原始的な防衛が蔓延しており、健康とは意識的、無意識的な不安と関りがあるため、不安に対して原始的な防衛に陥らず、組織が協力してそれを扱うことができるのならば子どもたちにとってよいモデルになり、それを取り入れ、心は成長する。しかし、実際は喚起される不安は甚大であるため、原始的な防衛が働き、組織がそのように機能する望みは低いと指摘する。それに対して Canham（1998）は、Menzies Lyth のこの指摘は正しいが、それでも児童養護施設には可能性があると述べる。社会的養育下にある子どもたちには、より強固でしっかりとしたコンテイナーが必要であるが、それが機能している集団であれば、個人やペアであるよりも不安に耐える力は高く、里親家庭よりも専門性を有した児童養護施設において実現可能だと主張する。ただし、そのためには、個人としても集団としても、子どもたちから受ける情緒的なインパクトについて考えることができる空間を作ることができなければならず、それは力動に組み込まれていない外部の人から定期的に支援を受けることでしか実現は困難だと指摘する。Britton（1981, 1989）が論じる「補完的行動化」とそれを観察し、無自覚に再演される物語について考える「三角空間」や「第三の視点」により、blind eye に陥らず現実を直視するためには、外から観察する視点を実際に確保することが不可欠なのである。

児童養護施設は岐路に立っていると最初に述べた。虐待は社会問題であり、国が想定する家庭の養育力は失われつつあるのが現状であり、子育ては社会が取り組むべき課題であるという認識が深まってきた。また、施設を退所した人たちの生きづらさ、生活保護受給率、犯罪率、貧困率の高さなど、それらの課題を解決していくためには児童養護施設でのケアのあり方を見直す必要があり、その要請は高い。また、「新しい社会的養育ビジョン」は児童養護施設に変化を迫り、新しい可能性を育むことができるのかを問う。児童養護施設が抱える課題、孕む可能性、どちらに対しても blind eye に陥る危険性があるが、私たちは反省や変化がもたらす痛みに耐え、現実を直視し、これからのケアのあり方を模索し、成長する機会とできるだろうか。神託を字義通りにしか理解できずに悲劇

が始まった「オイディプス王」の物語から学ぶべきことは、痛みを伴う現実に対し目を閉じず何ができるか考え、支援者や施設自体が成長することであり、それは支援する子どもたちの健全な発達や成長を促す推進力になると考えている。

## 引用参考文献


Bick, E.（1968）: The experience of the Skin in Early Object Relations, International Journal of Psycho Analysis vol.49, pp.484-486.

Bowlby, J. （1951）: Maternal Care and Mental Health. World Health Organization. 黒田実郎（訳）（1967）乳幼児の精神衛生，岩崎書店

Britton, R.（1981）: Re-enactment as an unwitting professional response to the family dynamics. Sally Box and Beta Copley（eds.）Psychotherapy with Families. London:Routledge & Kegan Paul Britton, R.（1989）: The missing link: Parental sexuality in the Oedipus complex. Britton, R., Feldman, M., & O'Shaughnessy, E. The Oedipus Complex Today. London: Karnac Books.

Britton, R.（1998）: Belief and Imagination Explorations in Psychoanalysis. Loutledge, London Bruner, J（1990）: Acts Of Meaning, Harvard University Press. 岡本夏木、仲渡一美、吉村啓子（訳）（2012）「意味の復権　フォークサイコロジーに向けて」ミネルバ書房

Canham, H.（2002）: Group and gang states of mind. Andrew Brigg（ed.）Waiting to be found. London: Karnac Books.2012

Cooper, A., & Lees, A.（2015）: Spotlit: defences against anxiety in contemporary human service organizations. Armstrong, D., & Rustin, M.（eds）Social Defences Against Anxiety. London: Karnac Books.

Diamond, J.（2012）: Creating a “third position” to explore oedipal dynamics in the task and organization of a therapeutic school. Andrew Brigg（ed.）Waiting to be found. London: Karnac Books Emanuel, L.（2012）: Turning a blind eye or daring to see. Andrew Brigg（ed.）Waiting to be found. London: Karnac Books

Freud, S.（1914）: Erinnern, Wiederholen und Durcharbeiten, 井村恒郎、小此木啓吾他（監訳）（1970）「想起、反復、徹底操作」フロイト著作集第六巻 , 人文書院

藤井聡、長谷川大貴、中野剛志、羽鳥剛史（2011）:「物語」に関わる人文社会科学の系譜とその公共政策的意義、土木学会論文集 F5，67（1）, pp.32-45

藤原伸夫（2019）:「改正児童福祉法」と「新しい社会的養育ビジョン」への一考察、福祉臨床科学紀要（16）、pp37-45、神戸親和女子大学

福本修（2006）：福祉と心理の間、NPO 法人「子どもの心理療法支援会」ニュースレター

平井正三（2011）：精神分析的心理療法と象徴化―コンテインメントをめぐる臨床思考、岩崎学術出版社

Hodges, J., Steele, M., Kaniuk, J., Hillman, S., & Asquith, K.（2009）:Narratives in assessment and research on the development of attachments in maltreated children. Midgley, N., Anderson, J., Grainger, E., Nesic-Vuckovic, T., & Urwin, C.（eds.）Child Psychotherapy and Research.Rutledge

Joseph, B.（1978）: Different Types of Anxiety and their Handling in the Analytic Situation, Internatinal Journal of Psycho-Analysis, 59.

河合隼雄（2002）：昔話と日本人の心、岩波現代文庫

厚生労働省子ども家庭局家庭福祉課（2019）:「社会的養育の推進に向けて」（2020 年 9 月 15 日）

牧園清子（2010）：児童福祉における自立の支援　―施設養護を中心に―、松山大学論文集第 22 巻第 1 号、松山大学

Menzies Lyth, I（1986）: A psychoanalytic perspective on social institutions. In: Containing Axiety in Institutions. London: Free Association Books, 1988.

Moylan, D.（2012）: Facing reality: Oedipus and the organization. Andrew Brigg（ed.）Waiting to be found. Karnac Books, London

ソポクレス（1967）：オイディプス王　藤沢令夫、岩波文庫

Sprince, J.（2012）: The riddle of the Sphinx. Andrew Brigg（ed.）Wanting to be found. London: Karnac Books

Steiner, J.（1985）: Turning a Blind Eye: The Cover up for Oedipus. International Review of Psychoanalysis, 12, pp.161-172

鈴木誠（2015）：ワーク・ディスカッションとは何か 『ワーク・ディスカッション』（序章）岩崎学術出版社 WORK DISCUSSION:LEARNING FROM REFLECTIVE PRACTICE IN WITH CHILDREN AND FAMILIES. Rustin, M（ed.）. London: Karnac Books, 2008

鵜飼奈津子（監訳）（2012）: 子どもの心理療法と調査・研究 プロセス・結果・臨床的有効性の探求、創元社

山本昌輝（2015）：パトスの人間学 オイディプース 運命と超越、メディアランド

Williams, G.（1997）: Double Deprivation. Internal Landscapes and Foreign Bodies. London: Karnac Books

（大阪人間科学大学心理学部助教）